

洗礼を受けられるイエス

今朝、わたしたちに与えられております主イエスの洗礼の箇所はルカによる福音書の独特の視点を際立たせるものになっている興味深い箇所です。どういう意味かといいますと、聖書はある出来事について複数の記事をもつ書物です。たとえば福音書は4つありますね。今日の洗礼の出来事はマルコ・マタイ・ルカ、みつつの福音書に記事があります。また十字架の出来事、復活の日の朝の出来事はヨハネも加えた4つの福音書すべてが扱っていますが、細かな部分が違うわけです。複数の証言者がいるためにクローズアップされる箇所も異なっており、それによって重層的にイエス様の姿が浮かび上がる。立体的になるとも言えるのですが、それぞれの福音書の記事が混じり合っていて、わたしたちのイメージを作ってしまうところもあるわけです。はやい話が一番情報量の多い記事に、さらに不足の部分を他の福音書の記事から足してある出来事を再構成してしまう。その場合の問題点ですね。この洗礼の箇所には特に強くそれを感じさせられました。なにが言いたいかというと、ルカが伝える主イエスの洗礼を記す出来事には福音書記者が書かなかったことにこそ特徴があるのです。ルカは引き算でこの記事を構成しました。短い文章ですから、もう一度お読みしますが、こうあります。「民衆が皆、洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように見える姿でイエスの上に降ってきた。～」まだ少し続きますが、ことがらをわかりやすくするため、ここで切ります。お気づきになりましたか。このルカの記述には洗礼者ヨハネが出てきません。「民衆が皆、洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると」と記されていて、誰が洗礼を授けたか、これは他の福音書の記

述から洗礼者ヨハネですが、注意深く彼の名前が除かれている。しかも、この直前の「洗礼者ヨハネ教を述べる」の箇所最後に、「ところで」と場面転換をして、ルカは、領主ヘロデがみずからの結婚や内政の失敗についてヨハネに批判されことに腹を立てて、ヨハネを牢に閉じ込め、悪行を増し加えたということわざわざ書いているのです。こんなふうに洗礼者ヨハネをていねいに舞台から退場させ、主イエスの洗礼についても授けたのがヨハネだとは名指しを避けています。マルコやマタイを知らない人が読めば、イエスに洗礼を授けたのがヨハネで、この二人の間で洗礼をめぐるやりとりがあったことなどは一切伝わりません。これは重大な変更だと言わなければなりません。この引き算に、ユダヤ人対象ではなく、ローマを代表とする地中海世界の人々にイエスがメシアであることを紹介したい福音書記者ルカの覚悟が見えるように思いました。キリスト教が誕生する母体となったのは言うまでもなくユダヤ教です。ですから、わたしたちはユダヤ教の正典である 39 巻の文書を旧約聖書として大切にしています。主イエスに洗礼を授ける洗礼者ヨハネは、いうならばこの旧約最後の人物であり、新約聖書への橋渡しをした人物です。つまりイエスがメシア、待望のキリストであることを指し示した。ここに洗礼者ヨハネの何者にも代えがたい偉大な業績があります。しかし同時に、この新しく生まれようとしているキリスト教にとって、ヒヨコのお尻にくっついてまわる卵の殻のような存在もおそらく洗礼者ヨハネだったのでしょう。ルカはですから洗礼者ヨハネの存在を必要以上に強調しなかった。そして、地中海世界、ようするにローマ帝国へ、イエスをプロデュースする道を選んだのです。後ろにはユダヤ教、前にローマ帝国、ルカが見ていたものは何でしょう。ユダヤ人も、ローマ人も、彼らが信じていたところ

があり、そこにイエス・キリストの福音がぶつかっていくのです。すこし歴史の話をしますが、ローマ帝国においてキリスト教が公認され、国教化されるのは4世紀のことで、それまでのあいだ、皇帝ネロの迫害など、大規模なキリスト教徒への迫害が起きています。これは皇帝を神として統治に利用しようとする帝国の方針に、キリスト者が従わなかったからです。これは戦前の日本で現人神である天皇を神とすることを拒んだためにキリスト教会や新興宗教団体が弾圧されたことにも通じます。そして4世紀に、キリスト教が公認されるときに初めての教会会議が開かれました。ニケーア公会議と呼ばれます。帝国内各地にあったキリスト教の拠点から人々が集まってキリスト教の教えの要点をまとめていったのです。国教化にあたって信じている内容がばらばらでは困りますので統一された内容が必要だったのです。現在、わたしたちが礼拝で用いる使徒信条の母体となったニケーア信条はこうして作られてゆきます。いい機会ですから、讚美歌の146、147ページを開いてみましょう。キリスト教とは何であるか、何を信じているか、何を救いとしているかという教えの筋道が書かれています。これは教理と呼ばれるもので、わたしたちの信仰の中心となるものです。

さて、イエス様の洗礼の箇所でなぜこのような話をしているかということ、実は、イエス様が洗礼を受けられたということの中に、このキリスト教の成立に関わる大問題があるからなのです。神学的問題といってもよいのですが、ユダヤ教とローマ帝国というふたつの課題、後ろに残してゆく世界と、これから入ってゆく世界と、それぞれにキリスト教が衝突した問題があったのです。これは使徒パウロの手紙にも取り上げられており、4世紀から5世紀にかけての教会会議で整理されてゆくのです。

が、簡単にまとめてしまうと、イエスは、人であるか、神であるかという問題です。さきほどのニケア信条と使徒信条の分量の違いはまさにイエスは何者かということに問題が集中していたことを示しています。ユダヤ教にとって、神は天地万物を創造された絶対者であり、唯一のお方ですから、メシアはありえても、神の子はありえません。メシアを待望する気持ちはありますが、みずからを神の子、神とするイエス、それを信じるキリスト教を許容する宗教ではありません。「神の独り子」というわたしたちの信じる場所はユダヤ教では受け入れられないのです。イエスが十字架にかけられることになるのは神を冒瀆した、神殿を冒瀆したということが大きな動機なのです。つまり、イエスは人であり、神ではない、これがユダヤ教の立場です。イエスが神であることにつまづくのです。一方、地中海世界の來世感、宗教観からいえば、この世という不確かで永遠の影のような状態から上の世界にシフトする。肉体を捨て、神々の世界である靈的な世界にシフトすることが簡単に言ってしまうれば救いの意味内容です。肉体に悪の元凶があるという考え方をもっていました。そうするとユダヤ教とは全く逆のベクトルで、靈であるところの神が人になるのがわからない。なぜ神である存在が人になれるのかがわからない。こちらはイエスが神ではないことにつまづく。後の時代に、パウロがアテネの広場で布教をしたとき、興味をもって聞いていた人々がイエスの復活の話になったら笑って帰ってしまったといえます。神は死なないからでありますし、またせつかく死んで肉体の牢獄から解き放たれて上方の靈の世界にシフトしたのに、肉体をまた取り戻して復活するというのはギリシア・ローマの考え方ではナンセンスなのです。これはイエスの人としての性質、人性と神としての性質、神性の問題として提起されました。今日

の話、なんだか学校の授業みたいになってしまっていますが、大事なところなのでもう少しお付き合い下さい。ことがらを十字架にしぼるとこの議論はわかりやすいのですが、もしイエスが神なら十字架で死ぬことはありません。神は不死だからです。そうするとイエスは十字架で死ぬふりをしたことになります。それでは茶番劇です。刑罰としての死をわたしたちに代わって肩代わりされ死ぬことが出来るのはイエスがまことに人であったからです。人であるから肉体の苦痛や、飢えに苦しむのであり、わたしたちの最大の敵である死を体験されるのです。そしてご自身の命を死に渡すことで贖いを成し遂げられたのです。また罪のない神の子であったからこそ代表して贖いの犠牲となられたのであり、そのためにはこの方は確かに死ななければならなかった。つまり、まことに神であり、まことに人であるという神性と人生がイエス様の本質であることを認めない限りキリスト教の救いは成り立たないのです。このデリケートな問題にイエス様の洗礼は触れています。罪のない神の子がなぜ洗礼を受ける必要があったのかということですね。ルカの書き方をみますと、そこには主イエスの決意が見て取れます。それは「皆が洗礼を受けているところにイエスも来られ、洗礼を受けて祈っておられると」と記されています。皆が、つまりすべての人が悔い改めの洗礼を受けられたところに、キリストも降りてこられた。人々の重荷を担うために、同じ目線に立たれた。ここにこの御方の救い方がある。救いの作法があります。上から下をみて蜘蛛の糸を垂れるような救い方ではありません。降りてこられるのです。わたしの傍らに来て下さるのです。そして、祈っておられる。そこに天が開けて神の霊である聖霊が降り、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という宣言がなされたのを居合わせた民衆が皆、聞くのです。

神の救いについて、これまでにルカはザカリアの口を通して「これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く」と取り次ぎました。人々を罪から救うために夜の闇を吹き払い、空を少しずつ染めてゆくあけぼのの光のようにやさしくくまなく照らしてゆく。そこにわたしたちの傍らに降られ、祈りをささげ、わたしたちに寄り添う神の愛の作法、憐れみがかたちとなった身の添わせ方をみる事が出来ます。すべての人を救いに招くために低きに降られる神の子を、愛する子、わたしの心に適う者と呼ばれる父なる神の御心と、この近さでわたしたちに寄り添われる主の愛はどんなときも、わたしたちから離れ去られない。その決意を、主イエスの洗礼の出来事から見て取って、わたしたちのために救いとなられた方の御業を喜びます。

お祈りいたします。